

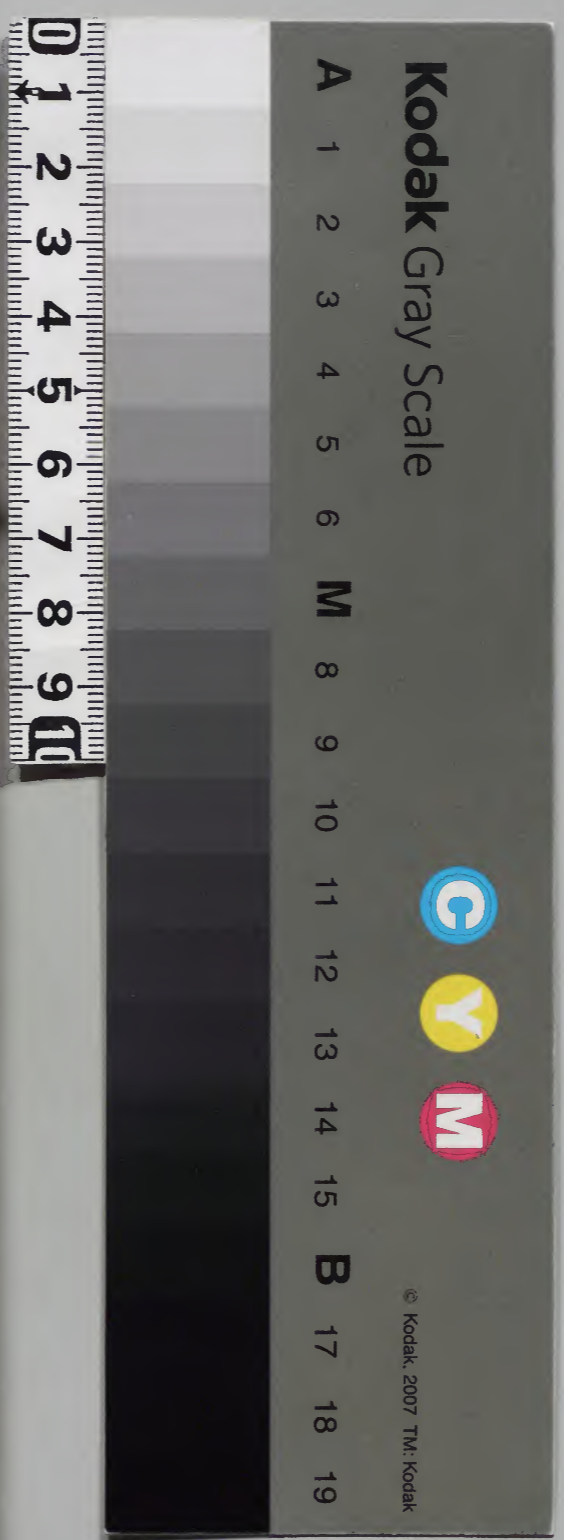
三五本圖考

內務省圖書
 第.....號
 書部.....類
 洪.....函
 共.....冊

太政官文庫
 和書門
 八〇九四號
 九三函
 三架
 二冊

內閣文庫
 和
 八〇九四號
 二冊
 二架

內閣文庫
 番號 和 8094
 冊數 2 (1)
 函號 185 27



洪



Handwritten characters in vertical column

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

Small handwritten mark

明治九年購求

三五本國攷序

質嘗讀本居先生古事記傳。

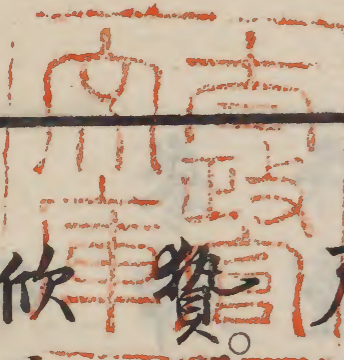
崇信古道。其後讀靈真柱。始知

世有平田先生。心竊嚮往之。

天保戊戌之夏。祇役江府。遂執

贊。謁先生於彙吹舍。先生

欣然。誌以古道原始。其其學的



曰。荒鴻之時。參神作造化之首。二靈為群品之祖。自是以來。神聖迭興。經緯天地。綱紀四方。神皇之道。自存其中。非如彼赤縣擬聖擬造。所謂聖人之道。故欲學古道。不可不知其古始。而

皇朝神典。幽深玄遠。不易窺測。是以世儒俗士。目為荒唐不經。東之高閣。無用力於其間者。余自志斯道。潛心神典。發先哲所未發。故立論之間。駭世取詆者不少。而雖及門之士。非聽余說。讀余書。暗通默契。

無不說者。則不可與共語也。吾
子其勉旃。質唯々而退。因思天
地無二。日月同照。則宇內人類。
悉出乎

參神之妙用。而飛潛動植。亦無非
其賦命者。乃在赤縣。其論剖判
之始。述神異之迹。皆託傳我

神聖之事者也。然質見聞單淺。未
得其可證。受是編讀之。據彼經
傳。以辨三皇五帝所出。證
我三本。而明五姓所由。旁及顯
頊諸氏。考證精博。論說確的。實
神典之所傳。足以破千載之惑。然
後知三皇五帝。乃我

神聖往彼土。教養其民者也。而彼
神所論者。即我
神聖之所傳。而其所述者。亦我
神聖之迹也。於是
神列之所以祖于万国者。斷然明
白。無復可議者也。嗚呼非
生高才卓識。博涉古今。烏能如
先

此哉。由此觀之。方今海外諸蕃。
皆我
神聖所養之苗裔。而具首丘祭魚
之性。故中世以還。四夷來
王者。蓋非以其有德於彼。而次
來報於
我哉。茲

天祖以八十綱索引遠國。懷柔四方之意也。今因先生著論。亦可謂益彰昭著明矣。先生崇屬實為之序。實以末學譎才。謹謝不敢。既而先生殲矣。今茲實又役于江府。令嗣鉄胤君奉先生遺意。出是編。又以為

請。實不獲辭也。因忘僭越。次其始所聞。先生之言。其讀是編所感發者。并於卷首。

文久二年六月

越前 中根師實謹撰

も。云むす形き。禍事ふおも有けり。たゞり我
と氣吹延舎の。神靈真柱大人もも。八意思兼は
神智坐まして。天雲の向伏極。見霽し明ら
めゆして。著し給へる書共は多形の中ふ。此
書たし。赤縣別ふ移ふ所の。之皇五帝と聞
由るも。正しく我が扶桑は神域より。渡り往
坐る神聖たちふ法在る由と。真澄の鏡。真清
明了。祥曉さ社ある形も。孔丘が。後世を可畏
や云けるも。此大人をやさし知らむや。所思

海をこり形り。皇國。蕃國。本末は理著くあら
を社て。最もさきけ説たし。白雲の漢居る
隈也。渙沫は留る極。八十綱亦延。徐より
引寄る事の如く。彼首長共の。臣と称して。仰
ぎし本末む導と形る。道は志を重ふて。いとと
太じき。清有功の。天地に貫き徹る説形りけ
り。たのま。此大人不就。かく正古こそ。我何
ふ事たし。去し天保は九年といふ。此清
許ふて。法教子の列ふ。のすまへら社たし。

しより此事知るが。起とを寝とは。忘ゆす可
知く。其恩頼を敬たう。おも有けるを。同じ十
四年の。閏九月二十日の。秋始。曉乃こ。明なり
けるが。夢とを。明く。現こ。それし。ふ。大人乃。旅
装し。給ひて。日向國ま。ど。来着。給ひ。近き。わ。が
少き。我。の。つ。ふ。と。う。あ。ら。ひ。給。も。む。や。人。し。て
案内。せ。せ。給。す。む。取。も。の。と。こ。り。あ。へ。交。只
い。た。ぎ。ふ。急。ぎ。ぬ。ら。す。十。四。五。里。あ。ま。す。も。由
きて。我。の。殿。乃。所。知。め。決。法。縣。郡。こ。城。の。い。ふ

所。ふ。ま。き。が。追。及。て。和。田。秋。野。も。来。れ。り。大。人
を。右。甲。ふ。着。せ。給。す。る。り。法。供。や。有。る。人。二。之
人。法。席。の。側。ふ。侍。り。き。健。明。る。御。面。ざ。し。を。常
より。を。丹。穂。ふ。咳。ま。え。在。し。て。能。も。た。く。ま。ど
を。出。来。ま。す。け。り。ふ。予。の。神。代。は。御。陵。ふ。と。未。詣。
且。の。高。子。穂。峯。や。大。官。の。旧。き。跡。所。を。と。拜。之
見。た。や。や。多。頃。は。思。ひ。あ。す。有。つ。ふ。を。今。思。ひ
ま。ぬ。案内。を。や。宣。ふ。ふ。あ。ま。は。見。ゆ。ふ。の。言。ふ
横。峯。西。照。る。を。韓。國。殺。ま。す。篤。嶽。と。い。ひ。此

二峯は涿の北形涿を。雞守嶽やあむまを次。
明日清供あききこゆ社を。い那ま若火く
出見命。葦不合命此沛陵ふまうで。返して其
所あしこ見回す。汝が里。まこ鹿兒島あも出。
瓊く株命のやきこ由涿。新田宮を拜と奉す。
肥の葦北よ里。筑紫豊國ふる里。速吸名門了
く。身滌を形し。出雲の株築ふ未詣むや思ふ
酌其までき。汝等とと休ひてをや室ふよ。
う社しとと。悉しとと。ま城さむむる中く那ふ

思ひあき。吾平山。高千穂峯あが。清先ままを
して。即て我家ふ入法在せるや思飛しが。其
ハ夢あして。はの形くさく先あをけり。さ花ど
さむのそ那る身現よりも。たしあれるやう
に思ひあさせり。奇しとちく有ける時しも。
鹿兒島小物ある事あまう。和田秋師。兒玉利
國あがあも。其こや法社をけまべ。そ其其大
人を。言とまう。あ忠心ふや。霊合ひ来あらむ。
近く出おちしま次こととや有那まう。然ら

むあま。早く告れこせよや。其言のさるも。夢
を語る答ふをあうぎりけり。其の同月其末
ふれ其有け海。程有やうあるべし。便りこそ
い待ましのむか思ふ間ふ。翌る二月。江戸ふ
物したる池田武純の許より。鐵胤の翁。秋田
よ告れこせら給し。去年其閏九月十
一日やいふふ。彼所あり。岩のら社給へふよ
しの消息取まき。先驚き。且歎くを其れ幸ふ
也。其れ長人也。思頼奉りて。今まぞ何と那く

急りしが。其事を兼て悔と。返らぬぞいき
づかえしきや。いので浄霊屋をふふら思
ふ物うら。遙けきかづれ多や。次うら。ぢや
七と勢もる。つる。思ひの祢子。け八月其
末の九日其日よ。其れ枕を結初て。四百餘
里其。海陸を渡ぎ初。東路さして急ぎりけ
まば。十月二日やいふふ。大江戸ふ。着た
けり。氣吹通舎ふ。あま。ごとと睡しくき
こえ。させ給ふ。年頃結が。社ある。心其結

るもやく解て。天人乃涕前を拜こなるふつ
けくも。怠れまし罪も。少もあがおちけく
おちして。速吸名門のみろぎ。そし現ふあ
らま志のバかぢつりれ清くしき。あらまし
や。在し夢の趣を。蘇ふ後。そしゆるふ。あれ
こよ。其そ又乃深き福ぎごとく。縁てよま
算もしゆること。終ふ事。竟られざり
しうむ。そをうきて。未清らきし。若らむ。
や云ち。ほくみぞ。そし身。たの愛。後。た

ちもきぎ。けるを。拙き己を。其國人。たよ
しこみ。入来。ゆるふ。けりや。ゆり。愛
合も。此むしえふ。又更。物。事。けり
ふ。け書のはし。書。遠く来ぬ。事。の由
を。書記して。言るに。被。取。戒。た
神真の。法。お。た。日女島。我。愛。蘇
り。速吸名門の。そし。あ。お
合せ。たの。事。ま。そ。曲
ふ考へ。著。し。給。其。説。の。正。身。こ。人。ふ

身みいいるるせせ。現世げんせいふふもも。眞まこと小こ神かみふふてて坐まけけててやや。い
 よよくくささるる。たたむむののししささはは添そ増ぞうしてして。其その歎なげびび。云
 ちちぞぞああええししももああららざざりりけけききばば。嘉永二年と
 いいふふやや。其そのままををおおきき八日やっぴつはは日ひ。薩摩さつま殿どの人ひと。竹
 内たけうち經のり成なり此この字あざなままるる次つぎ。

(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)

三五本図考上卷

遠江国 櫻井信影

大壑 平篤胤撰述

門人

備前国 志賀綿磨

豊後国 中根正義

同 校

三五とはモロコシ赤あか縣けん州しゅうにい謂いゆるる三皇五帝を云ふ。其そのみみふふ彼かの處ところに
 産うぶぶ非ひ交まじりり。その本図は皇国こうこくああららがが。彼かの蠢むし化かにた民たみ等らをを教おし養やしせ
 むむふふ免めんよよ渡わたすす給たまひひしし。我われがが神聖しんせいととちちふふ御おん座ざるる由よし。彼かの国くにの
 古書こしょをを徴ていしてして。論ろんじじ顯あららせせるる書しよぬぬるる故ゆゑ。かくかく名なけけぬぬりり。抑おさ三
 皇こうとと云いひひ五帝ごていをを云いふふとと彼かの国くに學まなびび去いははれれ人ひと等らの常稱じょうしやうふふ事ことあ
 るるをを能よくく辨明べんめいせせるる書しよをを有あるるとと無なれれぬぬ。先まずず此この義ぎをを此この

ふ論はむす。三皇は天皇氏。地皇氏。人皇氏。これ古説なほぐ。
五帝と云。伏羲神農。黄帝。少昊。顓頊を謂ふ。そは禮記月令ふ。
春三月。其日甲乙。其帝大昊。夏三月。其日丙丁。其帝炎帝。中央
土。其日戊己。其帝黃帝。秋三月。其日庚辛。其帝少昊。冬三月。其
日壬癸。其帝顓頊。と有る是あ也。逸周書。呂氏春秋。尚書大傳。
淮南子。あどよ載ある所も。
あれよ同じ。○鍊胤云。大昊氏。少昊氏。あどよの昊字を諸書よ。
多く昊と加き。又皞と皞とめ書とり。昊を昊の譌と見
え。其餘いぢまも。唯よ音義を借。用ひある迄。異ある義
あく。且ハ混らむし。れ。今は悉く昊と書改。免於見む人
本書と異ありと。此は五行此更王相生ふをゆ。其神の五帝
も訝る事勿き。
ふ配せは五帝して。其古説を。孔子家語五帝篇よ。季康子問
於孔子曰。舊聞五帝之名。而不知其實。請問何謂五帝。孔子曰。

昔丘也聞諸老聃曰。天有五行。木火土金水。分時化育。以成万
物。其神謂之五帝。古之王者。易代而改號。取法五行。五行更王。
終始相生。亦象其義。是以大昊配木。炎帝配火。黃帝配土。少昊
配金。顓頊配水。大昊ハ伏羲氏。炎帝ハ神農氏。黃帝ハ軒轅氏。
少昊ハ金天氏。顓頊ハ高陽氏。こま五帝あり。
五行。神の五帝よ配して。此を五方の人帝と。康子曰。太昊氏。
謂ふ。五行大義。まよ廣黃帝記。注よ見えたり。
其始之木何如。孔子曰。五行用事。先起於木。木東方。万物之初。
皆出焉。是故王者。則之。而首以木德。王天下。其次則以所生之
行。轉相承也。と有る是あ也。先輩此既よ論じ定免し如く。孔
子家語云。魏此王肅が諸書より
孔子の履歷を抄録して。孔家の自記。何託せる物あまど。ま
よ中よ。他書よ漏る。珍しき説も。何くれと出さる。今
く。其本書此失はる。幸よ。あて此書よ存まあり。今
五帝此説あど是あり。其餘も取交事ども少のらば。孔

此三皇五帝いぞ詳ふ所知る也。古三墳と題せる書に天皇
伏犧氏人皇神農氏地皇軒
轅氏と記せるを、孔安國が此序に依りて作れる妄説にて、
古三皇の傳を失はむ為にかく言ふあり、此書中より取ら
ざる説も無き非ざる都て、文子道原篇に古者三皇伏羲
神農黃帝得道之統立於中央神與化遊以撫四方云々禮稽
命徴ふ三皇三正伏羲建寅神農建丑黃帝建子至禹宗伏羲
商宗神農周宗黃帝所謂正朔三而改也。あど有は三皇を右
に符符れど猶訛れる異説多の也。其は春秋運斗樞に伏羲
女媧神農是謂三皇也。禮含文嘉に慮戲遂人神農謂之三皇
也。尚書大傳に遂人伏羲神農と云ひ白虎通の一
説に三皇者謂伏羲神農遂人也とも見えとめ白虎通の
異説に伏羲神農祝融三皇也をも有れど此等此説み非

あ也。然るに女媧氏の入る三皇を帝王世紀三皇本紀あ
ど此を用とまど女媧氏は伏羲氏に婦あむ此は三
皇に入らざる非也。次は遂人氏は命歴序考に辨ふる如く
伏羲の別号を異氏に訛れるをまむ此名の入らざる三皇の
説み非あり。次は祝融を伏羲氏の後より其名聞えとまど
諸侯に列ふて王者に非也。然れば是は三皇に入らざる
は非也。儲はと五帝と云ふも異説多の也。其は尚書に序
に伏羲神農黃帝に名を此み舉て三皇とは言はず。稽命
徴に此を三皇と云ふを思ふは少果。顓頊高辛堯舜を五帝
を爲すと著く。此は儒家に謂ゆる五帝に本説と聞ゆる。
大戴禮記及び家語の五帝徳に載せは孔子の語に黃帝顓
頊帝嚳堯舜を五帝と爲也。史記の五帝本紀を始め後世
此史ども多く此説を用ひて
尚書の序ある五はと或は周易の繫辭傳に伏羲神農黃帝
帝をば用ひ也。

堯舜此事を云ふ説はるよ依りて。此は五帝と立るれど。各彼を取て。此を取りて。他は是非し扱。今よ其説一定せ
づるを言ふ詮なき事なり。其は史記評林ある諸注家の説
其説紛々として依る更にも云ふ。綱目前編は辨疑。劉恕曰。梁
武帝以伏羲神農燧人為三皇。黃帝少皞帝摯帝堯為五帝。舜
非三王亦非五帝。與三王為四代。其指不通。歷故今そ此定説
世紛紛莫知定論。と云るを以ても知るべし。故今そ此定説
を出さむ。天皇氏。地皇氏。人皇氏。伏羲神農。黃帝。少皞。顓頊。
少昊。三皇五帝。此正古説なり。然るを周世に至りて。天地人
此三皇の事蹟を。不經れりと思へ。依るや。此を捨て。伏羲神
農。黃帝を三皇と立て。少皞。顓頊。高辛。堯舜。を加て五帝
を立しめ。此を疑ふく周公姫旦が存意よぞ出らむ。其は周
禮よ。謂

ゆる三皇五帝や。がて此三皇五帝と所聞れむ。然れど
も月令の五帝は。亦古説の依り。伏羲神農。黃帝。少皞。顓
頊。ある故。少皞。顓頊。高辛。堯舜。此五帝を。周代とす。の事也
知られ。此に依りて。伏羲神農。黃帝を三皇と稱するも。周代
よ此に舉ちふ。斯多。大戴禮。五帝德篇。ある孔子此語ふ。右周
事も所知とす。代よ立る。三皇五帝。此説を用ひ。三皇の中は。黃帝の
みを取て。五帝。此中。亦も少皞を捨て。黃帝。顓頊。帝。堯舜。此
五帝を説するは。是ま。此人の存意なり。其存意いふ。云ふ事也。未だ論
を俟べし。亦呂氏春秋。此高誘注。三皇。伏羲神農。女
媧。五帝。黃帝。帝。顓頊。帝。堯舜。也。と云るを。始め。異説らし
き言ども多けれど。其抑。斯は。加て。此少事を。し定論せむを。
何計。此事。亦非ざるを。今。判然と。説ふ。此ハ。總て
彼國の史學家。英斷。此才無。し。故。此を定論。云。依るや。

能はざる最も怯む事よき也。但し此を何ふ有らむ既も
よ非也謂ゆる六經諸子あどを解するを以て百小當る大義
る章句の間よ於てを解し得ざるも一以て百小當る大義
小於てを解し得ざる事多し然るを彼困人此性元より
鈍く困人此固より俊なるのみ淫去依徒をもと俊逸を依性
皇困人も常よ彼困籍よのみ淫去依徒をもと俊逸を依性
変じて其漢習於ひ其性此如く成て芳蘭此質ゆるも
鮑魚の肆ふ久しく置てを遂に鮑魚の臭よ変る如く俗
此儒者あどは久しく置てを遂に鮑魚の臭よ変る如く俗
終る倫も多る得る知て。列子揚朱篇よ太古之事滅矣孰誌之
哉三皇之事若存若亡五帝之事若覺若夢三王之事或隱或
顯億不識一也云依之然る語此如くも所聞れど此は固よ
世に懶き性ある人此却て其を道と心得あるが古を
稽ふる學をし益なき事と思ふ依よ出と依語なきを信

るよ足ざ依之儒者於此。楊朱字異端と斥しおく。却て
此語を用ふるは是を何ちふ意ぞも。史記の標註よ楊慎
帝与神農為一人羅泌路史以軒轅与黄帝非是一帝史皇与
蒼頡乃一君一臣共工氏或以為帝或以為伯而不王祝融氏
或以為臣或以為火德之主古云三皇之事若存若亡五帝之
事若覺若夢至哉言乎蓋洪荒之世存之論可也と云ひ胡一
柱が論よも大抵鴻荒闊遠不可得詳矣況孔子於書首唐虞
於易首伏羲伏羲以前皆未嘗道闕之可也と云へるを共
に揚朱が此語よ本也。儒者はと總て其考按不能はざる事
をば古書多く秦火小滅ある故。故實明免難しと遁辭を
れど此を以て彼を按し彼を以て此を考ふまば古傳此正
實大義比較畧いと著明ふ知はく我其知ある事をし存し
て論せ。闕如して在るを。豈信じて古を好む人と言む

や。彼、圀人よも早く、儒者の秦火よ遁辞を笑ひて、秦火の烬書も生涯よ読得る者あしと云、る人も有りきて其、赤縣州に古籍ともふ、謂也、依三皇より以前よ、上皇太一及び盤古氏夫妻を聞えしは、我が神典古事記に序ふ、乾坤初分、參神作造化之首と有る、參神を申せ依あまを、此は固よ、巴在九天、上と云ひ、生于大荒と云、牙る傳よて、其、圀よ出と依由よ非ざれむ、此をけし措きて、其、圀に在世と爲と依天地人れ三皇より辨牙むふ、先その天皇地皇を申せるは、即古事記の序よ、會易斯開二靈爲群品之祖と有依二靈を申し、人皇は乃其御子あ、然て都て此事實は、既ふ赤縣太古傳ふ出せれむ、此編よは、唯それ出自、殘のみ論へ、見

む人ま於其意を得て、但しそを三皇のみふ非、五帝のいでや、けし於るや、戎に昔を祖、圀也、馭免し道に本を見せばや。

一 春秋命歷序云、天地初立、溟滓始芽、鴻濛滋萌、歲起甲寅、元氣肇啓、有天皇氏、十二頭號曰天靈、以木德王、方八千歲、地皇亦十二頭號曰地靈、興于熊耳龍門等山、方八千歲、人皇九頭乘雲祗車、駕六提羽而出谷口、曰九河、依山川土地之勢、裁度爲九州、謂之九圀、各居其一、因是而區別、各三千三百歲。

此命歷序此文、本おれ周以前よ、巴有る依、易歷と云ひし

古書の文あるを也。既ス小著スせる春秋命歷序考イ論へ依レの如し。○天地初立とは。天地ス己スよ分判して。成立し竟スころ哉。謂ふ。○溟滓始芽ス也。元氣レ溟クと滓ルの中カ。自然ニ芽ムみ生スころ物の有ル依ルを云ふ。そは我ガ神典ノ古傳ノ思ヒ合セまバ葦ノ芽アリル也。○鴻濛ト滋リ萌スは。淮南子俶眞訓ニ。万物以テ鴻濛ヲ爲ス景柱トと有ル依ル。高誘注ス。鴻濛ハ東方ノ野ニ日ノ所出ル故ニ以テ爲ス景柱ト也。見ユえ。是ハ高誘ガ注ト。訓ニ。東開キ鴻濛ノ之ノ先トも有ル小依ルれル注アリ。莊子在宥篇ニ。雲將東遊シ過シ扶搖ノ之ノ枝ニ而適遭フ鴻濛ト云クと有ル依ル郭象注ス。鴻濛ハ元氣也とあり。鴻濛を東方ノ物ト也シ。雲を西方ノ物ト也シ。雲將ト名ケ共ニ神人ト也シ。如ク寓言セる也。は乃チ扶桑木ト異名アリ也シ。其レ也ヲ大扶桑ノ國ノ考ス。門人ノ言ヲあゲて記スる也。

○歲起ル甲寅也也。即チ天皇氏也。世ニ出始ス也シ。元年也。やゴて甲寅ハ元運ニ當ルる也。其レ既チ割リてシ天日也。乃チ東方ノ甲木ノ位方建ス。歲星も寅ノ方位ニ建ス始メれる也。年ハ卯也。故ニ小加ク傳スる也。尚ハ是ハ事ト既チ委ク。三曆由來記也シ。其レ書トもハ元氣肇ス啓ス也シ。加シ溟滓ト始メて芽ム。鴻濛ト滋リ萌スる也。是ハ甲寅ノ歲也。是ハ元也肇メて元氣ノ啓ス運スる也。由ル也シ。說文解字ニ。東動也ト有ル。徐鍇ガ通釈ニ。思ヒ合セまバ也シ。○有リ天皇氏トは。其レ東方ノ日出ル鴻濛ノ本域也。元氣肇メて啓スる也。甲寅ハ歲也。天皇氏始メて其レ域ニ出ス。由ル也シ。○以テ木德ト王トは。我ガ神典ニ古傳ニ據スる也。葦ハ生ス

とし生ふ依物の祖オヤふて。東方日域オヒハツより生始オヒハツます。木はと此域より生始オヒハツまます。天皇氏オヒハツあり。小生じて王キミとゆし故ふ。かく傳オヒハツへるなり。○地皇は即チ天皇氏の婦なり。是を以て洛コ書コ靈コ淮コ聽コ水コ。經注コふとよ。皆女コ。面而相類コと有り。けりて天皇を天靈と號し。地皇を地靈と號せよ。神典コ小男女コ此神也。天コをコ因コをコ小稱コ守コし例コ小同コじ。そ風コ神コのコ男女コをコ天コ之コ御コ柱コ命コ因コ之コ御コ柱コ命コと申し。水コ分コ神コをコ天コ之コ水コ分コ神コ因コ之コ水コ分コ神コと申し。多コくコひコ甚コ多コくコりコ。因コをコ乃コ地コと云ふ。古事記序コ小伊コ邪コ那コ岐コ伊コ邪コ那コ美コ二コ柱コ神コ此御事也。二靈コをコ書コれコしコ。諦コしコ此コのコ天靈コ地靈コをコ牽コ當コて。云コまコしコ語コと聞えぬ。○興コ于コ熊耳龍門等山コと云。天地二皇コ小通コる文コよて。此コはコ其コ東方日域コよコ也。赤縣州コ小渡コ也。給コひコしコ始コ也。はコ此コ等コの

山コよコ出興コせる由コなり。其山コ等コ此所在コをコ本編コ小云コす也。凡コてコ中コ小本編コと云ふコをコ皆コ赤コ縣コ太古傳コをコ謂コふコあり。けりて二靈コ共コり。十二頭コ也。有コるコ也。十二人コと謂コふコがコ如コし。其コをコ舊コきコ注コどもコ小。古語コ實コ故コ以コ頭コ數コ言コ之コ。非謂コ一人コ身コ有コ十二頭コ也。と云コ。依コよコてコ知コるコ。斯コてコ此コをコ各コそコ此コ分形コ小ぞ有コるコ依コ。人皇九頭コも準コへコ多コ知コるコ。後コ人コのコ説コをコ取コるコ。十二人コ九人コありコしコ事コよコ謂コすコ。後人コのコ説コをコ取コるコ。小足コらコびコ其コ由コをコ命コ歷コ序コ考コ小説コとコるコ字コ見コ依コべコし。○二皇コとコ毛コよコ。万八千歳コと有コるコ依コ。天皇氏コのコ万八千歳コ畢コ也。地皇氏コはコとコ万八千歳コをコ經コとコるコ義コよコはコ非コ也。路史コ小引コとコ依コ帝系譜コ小。天地二皇コ俱コ万八千歳コと有コるコ如コく。此コをコ夫コ妻コよコしコ有コまコバコ。二皇相耦コひコて。此歳數コをコ經コとコ依コ由コ也。○雲祇車コ六提羽コ也

ぞ謂ふた神典ノ天ノ之岩船ノと有るを同じ類あり。委く太
て知る。はて以木徳王ヲを云る。下此人皇氏までノ係レ也。出ル
谷口。一曰陽谷。上の二皇ノも該レと依文あり。司馬貞ノ三
皇本紀ノも出谷口トと有る。乃是より採ルる説ある。の谷
口を何所ニ此谷ノの口ニ云フこを諸注家ニ此説ヲ起故ニ。年ト來
いぬのしみ思ヒしを命歴序ノ。一曰陽谷トとも有る。よ依テて。
同所の異名よて。即チおグ皇国ニ此域内ニある事を知リと也。此ノ陽
諸書ノ湯谷まと陽谷おども書キて。亦ノ名字大壑とも。玄北
之門とも。咸池とも。甘淵をも云ヒて。乃チ我ノ神典ニあり。速
門ヲて。今ノ現ニ長門と豊前との岬あり。速靴の湍門あり。こ
と既小大扶桑國考ニ委ク説トる。如布下此ノ第四條も
云ヲ見ル。彼ノ國ニ此ノ海内海外。谷ニ多クの依中。おノ陽谷をし
る。ばし。

も打任チせて谷ト謂フる。依て谷チふ谷ニ元始あり故ト聞ケ也。
そは毛詩ノ東風ヲ習ク谷風ト詠ジ。爾雅ノ東風謂之。谷風
と有る。も扶桑此陽谷を。うち任セて谷ト云フ依故あるを思
ひ合セ。う於彼蜀志ノ。三皇乘祗車而出于谷口ト云フ依傳も
有ル字以て。三皇共。皇国ト出スる事を思ヒ決ムる。し。
此事ト既ニ命歴序考ふも。但シ今時ニ學者ら。多くは智見
論ヲる。字思ヒ合セてと。但シ今時ニ學者ら。多くは智見
狭キまば。然ル大荒外ニ陽谷あり渡れ也と云フを疑ヒて。
仍ト彼地内ありる。多く思フ倫も有ルむ。然れど此は扶桑此
陽谷ト渡れ依る。疑ふ。如古也。乘雲祗車駕六提羽ト有ル
ても著ク。う於彼命歴序ノ。人皇氏の次。六皇をいフ諸氏

は乃皇國の事あり。然るは第四條此本文。大荒東經。東海
之外。大壑。少界之國。と有て。少界氏。胡亂。あき皇國の産
あるを。其條ふ引とる河圖を始め諸書ふ。其母。女節。と云る
ら。華渚。よて少界を生とゆと有て。然れ。華渚。は渚。と同音あ
ゆを以て假用せしあて。更。小。由。あき文字あて。華。とは。
扶桑。木。此。華。ふ。因。れ。依。皇國の美稱。あゆこ也。大扶桑。國。考。ふ
論。子。依。が。如。し。然るを。通鑑。綱目。大界。紀。此。注。ふ。華。胥。今。在。陝
西。西安。府。藍田。縣。と云て。然る。ふ。其。陝西。と云ふ。地。を。圖書。編
ふ。依。て。攷。ふる。よ。雍州。の。域。内。て。加。此。漢。中。を。い。ふ。了。鄰。れ
依。處。ある。ら。赤。縣。州。此。西。極。と云。る。地。也。今。の。本文。ふ

位居東方と云ひ。木德ま。春皇。れ。と稱。云。る。ふ。叶。は。也。然。れ
む。其。陝西。ある。華。胥。は。後。ふ。東方。の。地名。を。擬。せ。る。名。あ。て。殊
う。其。陝西。れ。ら。む。よ。え。洲。とは。謂。ま。じ。此。者。也。ま。と。列。子。黃
大庭。之。館。奇。心。服。形。三。月。不。親。政。事。昼。寢。而。遊。於。華。胥。氏。之。國。
蓋。非。舟。車。足。力。之。所。及。神。遊。而。已。云。く。と。有。る。を。東方。の。華。胥
よ。本。按。きて。寓。言。せ。し。あり。然。る。よ。其。文。中。よ。有。る。兪。州。之。西。台
州。之。地。と云。る。語。あ。る。を。後。人。の。注。此。錯。簡。せ。る。あり。其。を。古
書。を。能。見。む。人。を。か。く。聞。り。む。文。此。趣。よ。て。忽。ち。悟。り。あ。む。抑
その。兪。州。台。州。は。淮南。子。地。形。訓。ま。と。河。圖。括。地。象。了。正。西。曰。
兪。州。西。北。曰。台。州。と。有。り。て。大。荒。外。の。西。北。ふ。在。る。州。名。あ。る
字。彼。錯。簡。せ。し。人。華。胥。の。本。州。を。得。知。ら。ず。臆。度。り。あ。り。云。依
物。あ。り。張。湛。注。よ。華。胥。此。下。ふ。不。必。使。有。此。國。也。明。至。理。之。必
如。此。耳。と云。る。ふ。て。も。張。湛。以。前。よ。か。此。錯。簡。文。の。無。て。し。事
を。知。ら。ま。と。り。然。る。を。有。ま。と。不。必。使。有。此。國。也。と云。る。は。張。湛
も。東方。よ。華。胥。ある。事。を。知。ざ。る。が。故。あり。案。を。此。寓。言。を。も。
東方。の。華。胥。州。此。神。域。あ。ゆ。よ。本。按。○。神。母。字。帝。王。世。紀。及。び
々。依。寓。言。ある。あ。と。明。かり。う。し。

諸書小母曰華胥也。地名を以て名と爲すと。其上と云
華渚北上也。生田圀秀云華胥とハ獬名よて宗之神典
謂也。天之冬衣神の後神刺圀若比賣命
○有青虹云々。本書小或説字引きて。歲星十二年一
周天。今叶以天時と云る如く。太皞氏を妊也。祥瑞也。星
也。東方分野の主星よて青帝の上都あまバ。然
る祥瑞を降しむ。然も有べき事よこそ。抑太皞氏の
事かの三皇本紀字始也。諸史小。太皞庖犧氏母曰華胥履大
人迹於雷澤而生庖犧於成紀。蛇身人首と云る説を飽まで
知れも。今此本文を取まる事は。數の古書小參攷して。動
まじ杞投證の有れむあり。其命歷序考此第十二條
よ論へるを見て知るべし。○長
頭脩目云々。春秋合誠圖小。蒼帝之爲人渠肩達腋。山準日

角。齋目珠衡。駿毫翁嶺。龍脣龜齒。望之廣視之專而長九尺有
一寸。孝經援神契小。伏羲大目。山準日角。衡而連珠。宋均注。伏
羲木精之人。日角額有骨表。取象日所出房所立也。珠衡衡中
有骨表。如連珠象玉衡星也。有也。蒼帝と云も五行の神
蒼帝と云も謂ふを庖犧氏その祥瑞ありて扶木
の圀よ生まじ故よ。ま蒼帝とも稱せるなり。○布至德于
天下。元々之類。莫不尊焉とは。其本圀を更也。赤縣州此元
元万民みれ尊奉せざ。依を無也。由也。但此を豈その本圀
らむや。万圀よても其傳へし各こそ替れ其。及び赤縣州此みあ
至德を蒙らざるは無きこと。本編よ云へ也。○以木德稱王
故曰春皇云々。は於東方小木を稱也。依事は。前條小云ふ
如く。元氣初也。立し所よて。艸木此本所ある中よも。博姦

蟠桃外ど云ひし大樹の有也し故ふ其域より出と依天皇
氏を始矣柏皇氏庖犧氏亦皆木徳と稱し東字は木徳
より日此出るよ象形して作也此等の事ども委くは大
扶桑罔考よ云るを見る
然まむ春皇と云ふも春はそれ東方より起るが故の稱
也其は楚辭離騷も吾遊此春宮今此注ふ春宮東方青帝
舎と云ひ葛洪枕中書も扶桑太帝治東方故世間帝王也子
處東宮也と有るて知べし亦不韵會を始め字書どもよ
も此説見えて春宮の春字東
の音よ呼ぶはと初發引とる孔子家語も季康子問曰大
皞氏其始之木何如孔子曰五行用事先起於木木東方万物
之初皆出焉是故王者則之而首以木徳王天下其次則以所

生之行轉相承也と有るも語は足らぬぞ太皞氏の東方小
出興し万物まよ也出於と云ふ義も能く聞えと也所
生
之行とて生日の干を云ふ其を路史も引とる五行書まよ
拾遺記も黄帝以戊子之日生故以土徳稱王也と有是
淮へて炎帝を火徳と稱せる也丙丁亦ど此日よ生ま少皞
を金徳と稱せる也庚辛亦どの日よ生れ顓頊を水徳と稱
せる也壬癸亦ど此日よ生れ故て然て世々襲ぐ也
とて其更王相生の次第を以て受とる事を知べし家語の
太宰純が増注も木生火火生土土之属と此み云るハ委し
らび此事も猶此餘れ著書も往く云こ也有るをも合せ
考ふ○位居東方以含養蠢化云く也位高く東方華胥之
圃小居して赤縣州小出張しそれ蠢化の民を含養し給牙
依と東方博桑木此仁徳も叶牙る故を以て木皇とも號
依由也此不委く大扶桑罔考
よ論をみるべし ちて其蠢化の民を含養

出張して都せし地を豫州と云ふ域内ある宛丘を云
る所不_レ多。陳とも云ひし去也。史記を始_レ諸書よ出_レるの
如し。然るは是陳を云ひし地名を古くも皇国を申土を稱
せゆ。太皐伏羲氏その神国よ_レ出張して都せし所を
故_レ號けし地名を_レ。其由を説文不_レ。陳宛丘也。段注按今河
南陳州府治
是其地許必言宛丘者為其字从_レ自也。毛傳曰四方高中央下
曰宛丘即_レ宛丘之宛中曰宛丘也。陳本太皐之虛正字俗段為
陳列之陳陳从_レ自从_レ木。太皐以木德。申聲。直珍。段古文陳と有
行而陳廢矣。从_レ自从_レ木。王故字从_レ木。申聲。直珍。段古文陳と有
也。徐錯が繫傳も早く陳者太皐之虛畫八卦之所木德之
始。故从_レ木と言_レ。韻會。州名楚滅陳為縣漢為。斯_レ此古文
此下の段注。按古文从_レ申不_レ从_レ木也云るも然る言_レ。此

を集韻も古作_レ申。毛氏曰。从_レ自从_レ木。从_レ申省。於文當作_レ東。从_レ
木中申與東東字不同。今文皆通作_レ東矣。と云ゆが如し。六書
正謔
よ_レ申。申よ作めて。申从_レ自。申。邑。ちて説文。申神也。从_レ自。自持
隸作_レ陳。傳寫之謬也。と云へり。也と有_レ。言ふ意は申は古_レ神字よて。神の又手自持せる
象形字ある義也。段注。曰。又手也。當是_レ从_レ一。疑奪字。失人
切と云ゆ。然る説_レ。然れど其説中_レ神也と有るを不
段借後_レ義字のみ思ひて。其_レ然らば皇国を指して。申国と
古義を忘れ_レる説_レ。云ひし古證_レ。申と云_レ。淮南子地形訓。世界_レ大九
州を説_レる所_レ。正東易州曰_レ申土。とある申土こそあり。然
ゆ_レ高誘注_レ。申復也。會氣盡於此。易氣復起東北。故曰_レ申土。

王水注東日之始風者教之始天之風生木故曰風生木風鼓草木數榮云
使也所以發号施令故生自東方也風生木故曰風生木云
云と見え八卦の巽は古易ふては東北此卦あるが故了風
木を配せるを以て知るばし然れど字彙よ左傳注を引
て姓者生也以此為父祖之相
生雖下及百世而此姓不改也云ひ通鑑前編よ因語を引
交て風者天地之正氣鼓動万物之謂也伏羲以木徳王天下
故以風為姓と云ひ古今原始よ得姓始於伏羲後稱黄帝吹
律定姓則又因生賜姓之始也と云るも皆理とる説あり
然る字路史ふ鄧氏姓書云伏羲東方之帝木能生風故為姓
豈其然哉謂上世嘗有風因因為姓爾故帝後有風后風因之
后也と云べ然れど此を事此本末違へべ其を伏羲氏そ此
風姓ありし故了其後裔此因よ風因何れ末を以て本を疑
ふるきよ非ざゆをやあ不太古傳の太界紀よ論ふを見る
べし風后と云ひし人此事も黄帝本

行記よ乃夢見大風吹天下塵埃求其人得風后於海隅と見
え此人よく太界氏の道を知れりとも有るよ就て考へと
る説も有べ其を黄帝紀よ云ふを見るべしはて天皇氏よ正始免て次よ此神
木此因を正渡して蠢化此民を含養し種よよ教導し給ひ
し故よ東を四方此首よおき風木を五行此首よ於くを始
免何事よも扶桑の神域を本處とは為とゆけべ蔡邕が獨
断よ易曰
帝出于震震者木也言宓犧氏始以木徳王天下也木生人故
宓犧氏没神農氏以火徳繼之火生土故神農氏没黄帝以土
徳繼之土生金故黄帝没少界氏以金徳繼之金生水故少界
没顓頊氏以水徳繼之云と云べ此類ある説を春秋繁露
白虎通五行大義おどま始め數の古然ゆは彼因此古昔は
書よ見えて今計ふる暇あらぬ
も蒼生の行ひ禽獸此如あべしを伏羲氏のお於教導しけ
ゆ趣を諸書よ多く所見とゆ中よ易乾鑿度ふ孔子曰上古

之時人民無別群物無殊未有衣食器用之利於是伏羲乃仰
觀象於天俯觀法於地中觀万物之宜始作八卦以建五氣以
立五常以正君臣父子之義度時制宜於是人民乃治君親以
尊臣子以順群生和洽各安其性と云。易此大傳小謂所
も此小同じ趣あり。お礼記禮運篇管子君臣篇墨子尚同
語おどを合せ読て彼固太古の人民此穴居野處して禽獸
と群を為し謂ゆる五倫此道をも知ざめしを伏羲氏と云
て。次くよ。教子立。抑諸蕃固を固と云。博彘本州の藥生此
繁茂せ依如き。未派此固くおまば。其蒼生此生始。いを卑
志死故。小猥雜ある中。小彼赤縣州をも。然び。小聞近くて。
本州の教子を最早く承賜はれる事は。神の此也。れ。支恩頼

を云。後し。素問此方宜論。東方之域。天地之所始生也。五行
大義。人生始於東方。木と云。依を共。博木此域。云。お。也。
言ふも更ある。豈天地人此み然らむや。其大道の本教を
も施與し。於ま。む。彼土を更あり。万邦此師。固と云。むも強言
小非。更。速。此考の前。後。記。説。ども。よ。上。士。こ。ま。を。聞。う。む。
正。て。吾。を。難。詰。ま。る。人。も。有。べ。し。其。人。の。あ。ら。び。道。ふ。至。ら。む。
下。士。こ。れ。を。聞。う。む。強。ひ。て。笑。ひ。敢。て。信。を。ま。と。敢。て。辨。明。
言。ふ。と。能。む。只。小。群。庸。を。煽。惑。して。誹。謗。を。傳。へ。む。其。云。ふ。
む。然。ま。む。本。編。字。通。読。せ。む。ち。て。淮。南。此。覽。冥。訓。小。伏。義。氏。
了。む。其。は。と。終。ま。止。時。も。有。年。ち。て。淮。南。此。覽。冥。訓。小。伏。義。氏。
女媧氏のか。此蒼生を教化し。竟て後。小。隱。没。せ。る。古。傳。を。載。
して。乘。雲。車。駕。應。龍。道。鬼。神。登。九。天。朝。帝。於。壘。門。於。上。帝。之。靈。

也。門。宓穆休于太祖之下。太祖、道之也。大宗也。也。有れ。其初、彼圜子渡

して、蠢化の民を含養、以て文法を立給ひしは、天の太祖及

び上帝に詔命オホミコトふ依れ、依事あるが、功烈をてふ竟て、かく朝

せる事を復命せ、依古傳れ、依れ、然れ、バこそ、三皇を更れ

も、正し、死古書よは没と云、死れ、没と云、出よ、對して、何処よ

ま、身、身を隠せる事よ、おそ、有、死の事よ、非ざるを、史記

を、は、し、然、依、古、書、よ、を、扱、お、が、ら、没、や、あり、し、を、崩、と、改、免

記、せる、可、多、う、る、を、皆、古、を、知、ら、ぬ、儒、流、此、小、智、見、よ、ぞ、有、れ

依、委、く、ハ、本、編、よ、云、シ、然、して、後、よ、無、窮、の、住、所、と、定、め、と、依、れ

扶桑本州あり、そは時則訓よ、東至日出之次、榑木之地、青土

樹木之野、太皞句芒之所司、と有して、此ま、上帝の命よ、ぞ

依れ、依れ、依、高、誘、注、よ、太、皞、庖、犧、氏、東、方、木、德、之、帝、句、芒、木、神、

司、主、也、と、云、ひ、太、皞、氏、を、東、方、よ、居、し、て、春、を、司

る帝と云、こと、礼記の月令、尚書、大傳、呂氏春秋の春紀、を

始め、諸書よ見えて、人、此、知、ま、る、事、あり、此、文、ど、も、を、既、よ、大

扶桑、固、考、よ、其、之、漢、武、帝、内、傳、お、依、西、王、母、此、語、よ、世、此、初、免

引、き、と、め、也、引、き、と、め、也、引、き、と、め、也、引、き、と、め、也、引、き、と、め、也、

よ、三天、太上道君、天降して、天柱を立て、五岳を植、とる事か

どを語る所よ、榑、太帝、于、榑、桑、之、墟、と、あ、依、太、上、道、君、は、上、帝

あるを以て知られ、且、王、逸、が、九、思、此、疾、世、よ、東、遊、訪、太、皞、兮

道、要、と、詠、じ、多、其、注、了、太、皞、東、方、青、帝、也、將、問、天、道、之、要、務、と

云、る、も、榑、桑、よ、帝、多、依、故、事、よ、本、扱、き、て、詠、出、せ、る、也、也、太、上

を、ま、と、太、上、元、君、と、も、太、上、君、と、も、諸、書、よ、所、見、と、依、中、よ、老

子、中、經、よ、太、上、元、君、曰、皇、天、上、帝、を、見、え、と、り、此、事、を、殊、よ、委

き、考、の、也、也、本、編、了、記、せ、り、後、世、の、道、家、老、子、を、太、皞、氏、か、く

扶桑靈域の神帝也、とて、東方を司、依、よ、起、原、して、木、生、火、

を云ふ理を以て。其次小功有也し神農氏也。火徳と稱せる
を赤帝と號けり。南方此帝も配し。火生土と云ふ理を以て。
其次小興れる軒轅氏也。土徳と稱せるを。黃帝と號けり。中
央の帝も配し。土生金と云ふ理を以て。其子少昊は金徳を
稱せる。白帝を號けて西方此帝も配し。金生水と云ふ理
を以て。其次小立とる顓頊也。水徳と稱せるを。玄帝を號け
て北方此帝も配せり。帝王の五運を云ふ也。是よ也起也。
但し此を彼國の古説よ。五行を司る神を。青帝。赤帝。黃帝。
白帝。黒帝と号くるが。各々別ふ東南中央西北に位して。世
に靈幸をひ其精を紫微垣内の謂ゆる五帝座に在ると云ふ
に依り。また太皞伏羲氏。東方扶桑に住はる事よも打合
せて。其方よ配せる物あり。此を顓頊の子。帝嘗の時
より定まし事あり。其を本編よ説とるを見依べし。 ちて

太皞伏羲氏。東方小立ちり隱身して御去る故。東王父と稱
せり。其を彼十洲記に扶桑地方万里上有太帝宮。太眞東王
父所治之處也と有也。また太皞伏羲氏。やめて太眞東王父
あるの故なり。抑太帝とは。大扶桑國考小云依如く。伏羲氏
此事を依り。其宮を東王父所治處を言ひ。玄學此諸書小。扶
桑太帝也。東王父也。も稱し。老子中經東王父の條に。名曰
伏羲とも有るを思ひ合せて悟るべし。老子中經に己未其
全書を見れば。此を雲
披三洞部よ引とる。尚言は。今の本文に庖犧以木徳王故
曰春皇位居東方以含養蠢化叶於木徳號曰木皇と有る小。
東王父を依り木公とも言へり。皇公ともよ。君の義を取り
て書とるりて。其意は牙を

異依と其木公傳小。木公万神之先也。亦云東王父冠三維之冠服九色之服居於雲房之間以紫雲爲蓋以青雲爲城仙童侍立玉女散香眞僚僊友巨億万計各有所職皆稟其命故男子得道者名籍所隸焉校定功業上奏元始稟命於太上也。中有小て知法し。上引淮南子覽冥訓。伏羲氏女媧應龍道鬼神登九天朝帝於重門宓穆休于太祖之下。有の熟く符へるを思ふべし。但し此事の神世は。大物主神の八百万之神を率て天皇祖神の復命し給ひ大物主を志て無窮の幽事あるし。食は趣み似たるを謂ひる事なり。下見べし。はと金母傳小。木公生于碧海理於東方亦號曰王父焉。金母生于神州理於西方亦號曰王母焉。與木公共理二氣而育養天地陶均万物矣。仙凡有九品其昇天之時先拜木公

後謁金母受事既訖方得昇九天入三天拜太上觀奉元始天尊耳とも有也。まよ葛洪枕中書も扶桑太帝住在碧海之昇天者在此也。と見えたり。是を以て伏羲氏を元より彼國の産よ非空扶桑神州よ也。渡まると云ふ説此証ざる事を辨ふべし。今の本文は伏羲居東方云々と云ふも此由あり。太眞宮とは疑なく出雲の大社なり。木公傳金母傳ともは薛太訓が列仙通紀に收めて引とるなり。はて此金母傳小。木公生于碧海と有る碧海は我が邊海を云ふ也。既よ大扶桑國考小説とす。金母生于神州とある神州を河圖括地象及び淮南地理訓よ世界の九洲此名を擧とほふ。東南神州曰晨土と有也。此を我が筑紫國を謂ふこと。本編了委く説とほり如し。三皇紀の第十三條を披き見て知るべし。前

西王母を諸書小。大真西王母とも見とる。大真東王
父は伏羲氏を依り準て思ふ。是を以て女媧氏も有
け依。其を伏羲氏とる木公と共。天地を育養し。万物を陶
均と云。必き女眞は。女媧氏を除きて誰り有らむ。彼五色
此石を煉めて天柱西岳を補ひし。故事をも思ふ。然
そ淮南子。伏羲氏女媧氏とも。上帝に朝し。復命せる由
の古説を見え。羅泌路史畢沅。山海經注。阮元。大
戴礼記補注。を初め。儒者の西王母を論ずる説等。多のまど。
其を皆非ある由。取総て天柱五岳餘論。辨ふるを見依
しかく。伏羲氏は。碧海扶桑北域に生れて。東方に位する
故。木公をも東王父をも稱し。女媧氏は神州に生きて。西
方に位する故。金母とめ。西王母とも稱せ。是を以て老

子中經。乾神號曰伏羲。坤神號曰女媧。と云。此乾坤の
方位を。謂ゆる先天後天。あぞの方位。非。古八卦。乾坤
も。東西を云。其を木公。理於東方。金母。理於西方。と有
依。相發して辨ふ。今傳える先天後天の卦位。をも
卦の眞面目。非。其眞の乾坤。を東西。と。及。八卦
を作れる事。本。彼。此。蠱。化。民。道。を教ふる。と。設。け。と
依。物。ある。由。も。何。も。太。暴。古。易。傳。小。委。く。説。き。辨。ふ。依。る。見。依
べし。○延喜祝詞式。東。文。忌。部。獻。横。刀。時。の。言。ふ。左。東。王
父。右。西。王。母。と。云。ふ。も。天。皇。南。面。して。御。坐。ひ。故。り。其。左。を
東。よ。て。東。王。父。其。右。を。西。よ。て。西。王。母。の。守。護。委。る。由。外。は。
偶。中。に。於。る。斯。て。其。呪。文。小。東。至。扶。桑。西。至。虞。淵。南。至。炎。光。北。
至。弱。水。千。城。万。固。精。治。万。歳。と。あり。扶。桑。固。に。坐。於。東。至。扶
桑。と。呪。せ。し。免。給。ふ。唐。此。呪。文。け。て。斯。此。如。く。内。外。此。古。書
を。其。依。り。用。ひ。給。ふ。れば。あり。伏
字考證して。扶桑の皇國なる事を知。尚委曲小思。伏

義氏東王父也。疑ふく神典亦依大國主神オホクニヌシ小坐サマし。女媧氏西王母也。疑ふく其キ后サキ神須勢理毘賣命ヒメノミコトよぞ坐サマる依ヨリ。前サキよ大和魂大物主神オホニニギハヤヒノカミと其キ后サキ神三穗津姬命ミホヅヒメノミコトを當アタとシ。是コトを以モて淮南子クワンチふ。伏羲氏女媧氏メノメノミコトの天アメふ復命ユキミコトせざる傳ツタあるも神典の旨サシは符カフひまカと女媧氏メノメノミコトを伏羲氏ヒコノミコトの妹イモと傳ツタ牙カまカと其キ婦メとも傳ツタ牙カとめ。妹イモ也ナリは彼カノ國クニよても古コノくは妻メ此事コトを云イハへシ。蓋カシは我ワグ古意コノれ遇タく遺コれるナリ也ナリ。彼カノ國クニ此コノ古コノ昔シノも妻メを妹イモと云イハひても知シべし。俗ソコの漢學者カンガクノシヤクども我ワグ古コノよ妻メを妹イモと云イハるナリを妹イモを妻メとせざるナリ禽獸ニシよ等トしテ亦モ論コト牙カるナリも有アるナリ。生涯シヤウヤよみ恥ハるナリ易コノ此コノ辭コトをさへシふナリ。是コトよシ延ヒきて尚ナホ考カふ依ヨリ。漢武帝カンブツ内傳ウチノツタヘまカと木公キコノ金母キボノ此コノ傳ツタヘあハるナリ。太タ上カミ道君ミチノミコトとも直タし

太上とも謂イハるナリは上カミふ云イハふ如ニく謂イハゆるナリ。天帝アメノミコト上帝カミノミコト外ソトの如ニく。即チちカまカ天皇氏アメノミコトノミヤノミコトふて。我ワグ神典カミノツタヘある伊イ邪ガ那ナ岐ギ大神オホカミ小坐サマし。元始ハジメ天尊テンソンと申イハふ也ナリ。即チちカまカれ盤古氏ヒツコノミコトふて。皇產靈ミムスヒノオホカミ大神オホカミ小坐サマし。御坐ミマる依ヨリ。右ミダ此コノ説コトども總スベテて本編ホンペン了マツ精スミ志シく考證コウジヤウせるナリを視ミ依ヨリ。然シカれど其カノ端倪ヘツビを云イハむナリ。天帝アメノミコトやカぐて天皇氏アメノミコトノミヤノミコトなる事コト也ナリ。五行ゴコウ大義ダイギよ。世記セキ星經セイキヤウを引ヒキとシるナリ。見ミえル。元始ハジメ天等アメノミコトや。伊イ邪ガ那ナ岐ギ大神オホカミの書シヤクども委イ曲キョク考證コウジヤウせるナリ。依ヨリ。神典カミノツタヘよ。説コトは彼カノ國クニ籍セキ此コノ事コト案アンを委イ曲キョク考證コウジヤウしテ牙カて後ノチ。事コト小縁コノの説コトよ非ヒ也ナリ。依ヨリ。依ヨリ。師シ此コノ古事記コノ傳ツタヘ少毘古シウヒコノ那命ナノミコトの常世トコヨクニ國クニ小渡コノ也ナリ。給タマ牙カ依ヨリ事コト。此コノ神カミ初ハジメ天アメ上カミよシ外ソト國クニ牙カ降坐カダリマせるナリを前サキ海ウミとシ依ヨリ來キ坐マるナリ。

は。外^ツ固より渡り來坐るふて。後よ渡^リ坐^ス常世^ノ固と有^ルは。外^ツ固ふ還^カ正^セ坐^セは。此^レ趣^リ據^テ按^オふ外^ツ固は皆も也。
此^レ神^ノ經營^堅成^シ給^テ予^ハ依^ル物^ハ依^ル也。然^レれど諸^レ外^ツ固は神^ノ世^ノ正^シき傳^ハ説^ルふも知^ラざる固^ニも有^ルべく、ま^ニ其^レ固^ニ此^レ語^ハお^もよ^ク異^ニある御^ノ名^ヲを以^テて、^レの^ト訛^リて傳^ハる固^ニも有^ル也。其^レ神^ノ靈^ヲ後^ニ世^ニまで崇^メ祀^スる社^ハ此^レ依^ル固^ニも有^ル也。其^レは^ニ異^ニれる御^ノ名^ヲある也。正^シき事^ヲ知ら^ズて在^ル、亦^ニ正^シけり。抑^シ今^ニか^ク言^フを聞^カむ入^リい^ウふ思^ハむ。千^ニ年^ノも餘^リて、昔^ノ外^ツ固^ハ此^レ説^ヲ字^ヲみ聞^カふまで。心^ノ底^ニふ深^ク著^クとる世^ノ人^ハお^もれ^ハ並^テて信^ズふ人^モを^レち^ク有^ルは^シま^ニども。然^レれ徒^ラ何^カふも有^ル皇^ノ御^ノ固^ノの物^ヲ學^ビせ^ム入^レ。此^レ事^ハ心^ヲ得^テ居^ルべ^シ死^ス物^ヲぞ^モ言^ハま^ス也。

依^リ驚^カされ。ま^ニ後^ニふ大^ニ固^主神^モ外^ツ固^ニ往^キ來^シ給^ヒ。其^レ御^ノ子^神こ^チを^モ四^方外^ツ固^子班^チ遣^セる事^ハ依^ルふ。年^々あ^らる思^ヒを潭^メて。其^レ御^ノ行^方や何^レ處^ニあ^らむと。索^シ隱^セる説^ヲも有^ル。依^リ師^ヲ始^メて。神^ノ世^ノの故^實を解^明されし無比^ノの大^ニ業^ヲ究^メられざりし故^ニ。外^ツ固^ニ此^レ學^ビよ^ク於^テは。依^リしも深^クた^ラ元^々より。宇^ニ宙^ヲ万^ニ固^ヲを透^視すべ^シ古^ノ學^ノ神^ノ眼^ヲを具^セる大^ニ偉^ニ人^ニよ^リは^シせる故^ニ。僅^ニくある此^レ一^ノ章^ヲ果^シて其^レ言^ハ空^シし^クら^ズ。今^ニも篤^ニ亂^レる外^ツ蕃^ノ古^ノ傳^ヲを網^羅し。明^ラむる考^證の^大じ^キ真^實誥^ハあるも。依^リて其^レ少^シ昆^古那^命此^レお^も也。玄^ノ學^ハ此^レ古^ノ書^トも^も。泰^一小^子。東^海王^清華^小童^君。東^華大^神青^童君^方。諸^レ青^童君^青真^小童^君れ^ど見^エて。人^ノ皇^氏ふ傳^ヒて世^界を^造正^シ。伏^義氏^よ三^才此^レ道^ヲ傳^テ予^ハ。神^農氏^よ醫^藥の事^ヲを教^テ予^ハ。

黄帝老子ノ養神金丹ノ法を授ケるヲ始メ也。おれらの事ども本編これ諸氏ノ所クるヲ委ク考ス牙注せむを見べし。其事實ハ多クの中にハ漢武帝ガ時ニ西王母ト共ニ降ル。女真上元夫人ハ語リ。青真小童君ハ元始天王ノ入室ノ弟子也。形有ニ嬰孩ノ之貌也。故ニ仙宮以青真小童ヲ爲シ號ス。其爲器也。環朗洞照。聖周万變。玄鏡幽鑒。才爲真僞。館于扶廣。權始運游于玄圃。治仙職云ク。と。班固ガ記ス。漢武帝内傳ニ見ユ。其祠も漢土ニ更ニ汎ル。印度も思ヒ合ス。事ども多クの中にハ師ハ見ユ。いハらハ神ノ形ヲらズ。ばヤ。方諸扶廣ニ同所ヨて山ノ名あり。そは木公傳ニ青童君ノ治方諸山ハ在リ東海中ト云ヒ。紫陽真人傳ニ乃チ到リ桑林登リ扶廣山遇フ青真小童君受テ金書祕字ヲおど有ル。ふて知ルべし。おれ委クて見ユ。ばシ。張果ハ盤說ス。帝王世紀云。太皞ハ畫シ八卦以類シ万

物之情。六氣六府。五藏五行。含易四時。水火升降。得以有象。百方之理。得以有類。乃制九鍼。孔叢子ニ伏羲始嘗草木一日而遇七十二毒おれ有リ。謂フ也。依神僊ノ方術。及び醫藥鍼灸ハ此道とも。もよ。此神真ノちノ傳ヲとス。事ある。故ニ玄學ノ古書等ニ。其法方ハ此傳來を云フ。と死。多ク扶桑太帝。西王母。小童君と稱ヘ。也。おれハ卦ニ更ニあり。文字音律謂フ也。五倫ハ此道も。何カも其本ハ皆コノ神真等と也。出ス。とる。おれ本編ニ説ク。を見て知ル。べし。中ニも方術醫藥の中にハ道を傳ヲし事ハ神典よく符ヲとるを思フ。べし。ちテ廣黄帝本行記ニ。黄帝ノ從ヒて。真一ハ道ヲ問フ。神僊ハ天眞皇人と云フ。有リ。也。此ハ扶桑君ノ所使と志ス。我ハ崑山ニ僊宮を治ム。由テ云フ。扶桑君トハ。扶桑太帝ハ事ハし有。と

む。此は大國主神此御子神^{コガミ}とちを四方^{ヨモ}此國^{コク}は班^ハち遣^{ツク}せ
と有る^ナ中^{ナカ}の一^{ヒト}神^{カミ}を依^ヨるや知^{シル}るし。今^{イマ}記^キせる考^{コウ}證^{テイ}の數^{スウ}十^{ジュウ}倍^{ハイ}あれど此^{コノ}編^{ヘン}ハ多^{オホク}く三^{サン}皇^{クワン}五^ゴ帝^{テイ}の本^{ホン}國^{クニ}此^{コノ}皇^{クワン}國^{クニ}ある事^{コト}を記^キすも大^{オホク}意^イを記^キせるれり。

春秋外傳晉語云。司空季子曰。昔少典取於有蟜氏。生黃帝炎帝。黃帝以^テ姬水^{キスイ}成^ル。炎帝以^テ姜水^{カニスイ}成^ル。故黃帝爲^シ姬^キ。炎帝爲^シ姜^{カニ}。二帝用^ニ軍^{クニ}以^テ相^サ濟^ス也。

黃帝本行記の本注ふ。伏羲生^ム少典^{シウテン}。少典生^ム神農^{シナン}及^ツ黃帝^{ワウテイ}と見え。賈誼^{カニ}が新書^{シンショ}も。黃帝^{ワウテイ}者^ハ炎帝^{エンテイ}之^ノ兄^{ケイ}也^{ナリ}と云へ。新書^{シンショ}の文^{モン}史記^{シキ}此^{コノ}評^{ヒョウ}林^{リン}引^{ヒキ}たるふに。炎帝^{エンテイ}者^ハ黃帝^{ワウテイ}之^ノ同^{ドウ}父^フ母^ボ弟^{テイ}也^{ナリ}と見え。然^{シカ}れど同^{ドウ}母^ボは^ハ非^ヒび。此^{コノ}事^{コト}都^スては。既^スふ春^{シュン}

秋命歷序第十四條の考ふ記せる如^カうて。晉語の炎帝爲^シ姜^{カニ}と云へ。黃帝^{ワウテイ}と炎帝^{エンテイ}神農^{シナン}氏^シ也^{ナリ}。兄弟^{ケイテイ}ある由^ユうて。新書^{シンショ}も謂^イふ所^{トコロ}も。是^{コト}趣^ソあり。黃帝^{ワウテイ}神農^{シナン}共^ニ伏義^{フクギ}の孫^{ソノ}少典^{シウテン}の兄^{ケイ}あり。然^{シカ}るに神農^{シナン}氏^シ。其^ノ父^フ兄^{ケイ}を除^{ノク}きて。伏義^{フクギ}氏^シ此^ノ後^{ノチ}を承^{ツク}る。如何^ニと云^フふ。伏義^{フクギ}氏^シ去^クて。五行^{ゴウケイ}の更^{マシ}王^{クワン}相^{サウ}生^{シヤウ}を考^{カウ}定^{テイ}めて。帝王^{テイワウ}の五^ゴ運^{ウン}を立^{タテ}し。故^ユに木^キ德^{トク}ある伏義^{フクギ}此^ノ後^{ノチ}を火^カ徳^{トク}ある神農^{シナン}此^ノ受^{ウケ}たるれり。季^キくは命^{メイ}歷^{レイ}序^シ考^{カウ}を見^ミるべし。はて伏羲^{フクギ}氏^シの本^{ホン}都^ト也^{ナリ}。東方^{トウホウ}華^カ渚^{シュ}此^ノ州^{シュウ}ふ有^{アル}し。少典^{シウテン}也^{ナリ}。更^{マシ}ふ。黃帝^{ワウテイ}炎帝^{エンテイ}ともふ。其^ノ州^{シュウ}ふて生^ナれしを^ヲ知^ルは^ハ。其^ノは命^{メイ}

歷序。有神人名石年。蒼色大眉。戴玉理。駕六龍。出地輔。號皇
神農。云くと有。よて。ま於彼圀の産からぬ事を知。る。殊。小
初條の末。云ひし。入皇氏。其子孫。六皇。此中。凡ゆる辰。故氏を。
同書。駕六蜚。塵。出地。郭。とある地。郭。今の地。輔。と音。近。り。れ
ば。同所。と聞え。ら。於龍。麿。小。駕。して。あ。と。有。る。は。悉。東。海。外。よ
に。渡。來。れる。例。ある。を。思。ひ。合。せて。曉。る。べ。し。地。郭。を。宋。均。注
言。ひ。て。彼。圀。の。何。処。と。云。こ。と。無。ぶ。を。海。外。と。云。ひ。て。故。あり。姫
水。と。云。ふ。を。此。ぞ。姜。水。と。云。ふ。を。彼。ぞ。と。云。ひ。て。彼。圀。に。有。る。
は。謂。へ。る。説。此。有。る。を。皆。例。の。如。く。外。圀。の。名。を。擬。し。名。け
し。物。あり。○。圀。秀。云。あ。く。よ。名。石。年。と。ある。よ。て。も。多。伎。都。比
古。命。の。御。魂。此。石。神。あり。と。云。は。ち。て。帝。王。世。紀。小。神。農。氏。姜。姓
也。母。曰。姪。姪。有。喬。氏。之。女。名。女。登。遊。於。華。陽。有。神。龍。首。感。女。登。

於尚羊。生炎帝。長於姜水。以火承木。故謂炎帝。都於陳。在位百
二十年。也。也。漢。王。符。が。潛。夫。論。よ。有。神。龍。首。出。嘗。感。姪。姪。生。
接。神。契。よ。任。已。感。龍。生。帝。魁。鄭。玄。注。よ。任。已。帝。魁。之。母。也。魁。は
神。農。名。已。或。作。姪。あ。ど。見。え。と。り。已。姪。い。よ。し。牙。同。音。あり。は
て。古。微。書。よ。出。せ。る。春。秋。元。命。苞。此。文。よ。少。典。妃。安。登。游。于。華
陽。有。神。龍。首。感。之。于。常。羊。生。神。子。人。面。龍。顏。好。耕。是。謂。神。農。と
あ。也。此。文。路。史。よ。引。と。る。よ。神。子。の。二。字。あ。く。神。龍。多。神。童
と。あり。ま。と。金。樓。子。も。同。説。ある。を。有。神。龍。感。女。登。生。炎
帝。有。聖。德。云。く。と。神。母。此。名。を。世。紀。小。女。登。と。有。る。を。元。命。苞
よ。安。登。と。有。也。は。孰。し。是。字。知。ら。ば。其。生。於。何。所。也。世。紀。よ
尚。羊。を。何。る。を。元。命。苞。よ。常。羊。と。有。也。尚。と。常。を。は。古。通。用
せ。し。故。よ。互。ふ。誤。れ。る。例。古。書。よ。多。り。れ。也。此。を。常。羊。を。正。の

ゆらゆら。五行大義五帝論、母任姒名、女登感神龍、其淮南
而生帝、於常年と有る年、羊の誤写あり。其淮南
此天文訓、宇宙此四維を云、此文、東南爲常羊之維とあ
りて、我が筑紫九州の方位を指せむあり。彼、圀より東南の
必、我が九州あり、如し。けりて其母此華陽、游ぶとあるは、即
ち既云、牙の如し。けりて其母此華陽、游ぶとあるは、即
ち此華陽の陽と聞えし。其華を云ふ地名也。も、彼、扶
桑木よ、謂ふ言、れまむあり。是を以て、皇圀を廣く指て、東
既、委く、大扶桑、圀考ふ云、牙りき、は、と黄帝を世紀ふ、黄帝、少典之子、姬姓也。
母曰、附寶、見大電光、繞北斗、樞星、照野、感附寶、而生、黃帝、於壽
丘、受圀、於有熊、居軒轅之丘、故以爲名、以土德、王在位百年と
見えし。河圀握矩記、黃帝名、軒轅、北斗、黃神之精、母、地祇
之、女、附寶、之、郊、野、大電、繞、樞、斗、星、耀、感、附、寶、生、軒、轅、

文曰、黃帝子、と有り、說、郭、始、開、圀、と引、とる、も、此、よ、同、じ、潛
夫、論、大、電、繞、樞、星、野、感、符、室、生、黃、帝、代、炎、帝、氏、其、德、土、行、云
云、と、有、り、五、行、大、義、は、と、金、樓、子、及、び、竹、書、紀、年、の、沈、約、が、傳、
ま、と、詩、含、神、霧、も、同、じ、趣、あり、援、神、契、の、注、よ、附、或、作、付、也、と
見、え、け、り、て、本、文、晉、語、ふ、少、典、取、於、有、蟠、氏、生、黃、帝、炎、帝、を、云、ゆ
也、同、母、兄、弟、此、如、く、聞、ゆ、れ、ど、も、世、紀、を、始、久、諸、書、の、説、よ、て
は、其、母、互、ふ、異、れ、也、按、ふ、よ、此、を、安、登、符、寶、と、も、ふ、有、蟠、氏、此
女、て、姉、妹、形、る、る、其、住、所、を、別、ふ、せ、し、故、よ、炎、帝、黃、帝、の、生
所、及、び、成、長、の、所、も、各、く、別、あり、此、を、其、母、あ、ち、此、處、よ、育、び
る、上、代、此、趣、ふ、符、へ、也、其、を、神、典、よ、神、等、各、く、其、の、御、母、此、許
と、る、を、思、ひ、合、せ、け、り、斯、て、炎、帝、此、馭、戎、ふ、都、せ、は、陳、を、伏、義、氏、此
て、悟、ゆ、べ、き、あり、彼、圀、ふ、都、せ、し、所、ま、と、黃、帝、の、傳、よ、受、圀、於、有、熊、と、有、る、は、乾

坤鑿度よ。黄帝曰。太古百皇。闢基文籀。遽理微萌。始有熊氏と
 有依。蒼頡注と云ふよ。有熊氏。庖犧氏。亦名蒼牙也。と見え。坤
 鑿度。武英殿叢書中。小収りて。其第一。よ出とる。首。よ清
 主の考説。及び諸臣の提要あり。只。了乾鑿度と称する書と
 尤別書。譙周。古史考。よ。黄帝。有熊国。君。少典之子也。と有依
 を合せ考ふる。此。ま。本。を。皇。国内の地名。よ。て。庖犧氏。少
 典氏。黄帝氏。相襲ぎて。居。は。ち。地。と聞え。生。於。壽。丘。と有る
 は。其。有。熊。域。内。の。小。地名。ある。よ。を。炳。焉。く。彼。国。よ。有。熊。を。い
 ふ。所。ある。は。例。れ。如。く。黄帝。そこ。小。徙。して。後。よ。本。邦。の。名。を
 擬。せ。依。こ。と。言。ふ。も。更。れ。也。史記の注。皇。甫。謚。云。壽。丘。在。魯
 六。里。有。熊。今。河。南。新。鄭。是。也。と。あり。東。門。之。北。今。在。兗。州。曲。阜。縣。東。北
 有。之。共。よ。彼。小。擬。せ。る。地名。あり。は。と。居。軒。轅。之。丘。とは。赤。縣

州の地を遙サカし西サカに放サカして。天竺といふ地方サカに有サカす。黄帝を
 て。赤縣を平治して。其中サカ世サカよ。か。れ。天竺。字。馭。米。て。久。ち。く
 居サカち。所。ある。故。し。軒。轅。之。丘。と。も。固。と。も。稱。せ。る。こ。を。山。海
 經。ま。と。黄。帝。本。行。記。あ。ど。よ。所。見。と。依。の。如。し。然。る。を。上。よ。出
 帝。王。世。紀。よ。黄。帝。居。軒。轅。之。丘。故。以。為。名。と。有。る。を。本。末。を。違
 子。し。説。あり。軒。轅。と。北。斗。黄。神。の。称。ある。を。黄。帝。そ。れ。精。よ
 因。り。て。生。ま。し。故。よ。軒。轅。と。云。よ。て。此。を。固。よ。り。其。名。ある
 が。軒。轅。の。居。せ。る。所。ある。故。よ。其。域。を。軒。轅。と。称。せ。る。れ。依。り
 や。世。史。綱。鑑。れ。類。れ。依。後。世。此。史。等。よ。母。感。電。光。繞。斗。而。有。娠
 生。帝。於。軒。轅。之。丘。あ。ど。云。よ。る。を。皆。故。案。を。知。さ。る。れ。り。委。く。を
 本。編。を。見。て。は。て。史。記。よ。黄。帝。者。少。典。之。子。姓。公。孫。名。曰。軒。轅
 也。見。え。索。隱。よ。本。姓。公。孫。長。居。姬。水。因。爲。姬。姓。と。有。也。此。を。東
 王。公。伏。義。氏。此。嫡。孫。ある。故。を。以。て。公。孫。を。姓。を。爲。と。め。と。聞

えふ也。然るを公孫姓を周代の公孫とる者よ稱せるより
始まれり姓れまバ黄帝此公孫姓ぬ依べき由あり
と論へる説も聞ゆれども彼と此と
は元より其由來の異なる者字や
帝居姫水因以爲姓从女臣聲と有也。下引く姓字此文よ。
因生曰爲姓と有るを思ふよ。黄帝此母符寶と云ひしは彼
女嶋也。臣てふ所此水邊に居せる故に姫氏を稱し。姜字也。
同書よ。神農居姜水因以爲姓从女羊聲と有るを思ふよ。彼
常羊と云ふ所此水邊にその母安登に住め依故あるはし。
然れど臣羊は主字よて。女を女嶋の名よ因まる从字也。
説文の段玉裁が注ふ按姜姫字蓋後所製と云ふ其姓も
と臣羊あるの後に女を从とるからむを云依意なり本の
由緒を然依事れまど己を
當昔此製あらむをぞ思ふ 韻會小。姫婦人美稱師古曰婦人

美號皆稱姫。毛詩彼美淑姫。疏美女謂之姫。姜黃帝姓姫炎帝
姓姜其後子孫盛其家之女美者尤多遂以姫姜爲美稱也。
云牙也。姫を盈之切音與頤同と云へれど古音を居
之切あり姜を居良切を有るぞ古音ある けて此
姫姜の姓に作也始は也しよ也。凡て扶桑暘谷の域より出
るむと所思る諸姓の多く女よ从ふ文字れるふ就てよと
姓字を稽ふ依よ。説文小。姓人所生也。古之神聖母感天而生
子故備天子因生曰爲姓从女生生亦聲と有也。段玉裁云五
經異義詩齊
魯韓春秋公羊説聖人皆無父感天而生左氏説聖人皆有父
謹按堯典以親九族即堯母慶都感赤龍而生堯安得九族而
親之詩言感生得無父有父則不感生此皆偏見之説也商頌
曰天命玄鳥降而生商謂城簡吞胤子生契是聖人感生見於
經之明文劉媪是漢太上皇之妻感赤龍而生高祖是非有父
感神而生者也且夫蒲盧之氣姫照桑蟲成爲己子況乎天氣

因人之精就而神之反不使子賢聖乎是則然矣又何多怪此鄭君調停之說許作異義時從左氏說聖人皆有父造說文則云神聖之母感天而生不言聖人無父則與鄭說同矣と云り然る言あり因生曰爲姓古今韵會小春秋傳天子因生以賜姓白虎通姓者生也人所稟以生也左傳注以此爲祖父之相生雖百世此姓不改也と云ひ
段玉裁亦云く因生以爲姓若下文神農母居姜水因以爲姓黃帝母居姬水因以爲姓舜母居姚虛因以爲姓是也と云へり同說あり
从女生は許慎が文意上ふ古之神聖母感天而生子と云係を思ふ。此を段注よ感天而生者母也故姓从女生會意と云る意と聞えと云然れと若是説の如くは母生よ从ふ法きを女生よ从ふは許説是ふ似て必非ふ抑姓を大界氏の扶桑女嶋ヒメジマの所在よと出て風姓を稱せるが首形ハシメる

た也。既スデふ謂ふ如ふまむ。姓字決キハめて此義ふ因ヨて製せ係文字あり。然るよ其古説は早く誤り失ひし故よ許慎が決断を以て右の如くを説しあらむ其を姓字此本來。もし許説及び段注此如くは。堯まと契あぞは。第六條よ注委係如く。無父と云ばう。母よ神感有しう。殊コトふ女う。從ふ字此姓外係べきふ。伊祁まと子姓あるは何イハぞや。此コを本モトよと扶桑神州の産よ非アラざ係故よ。其姓字を女う。从はざるあり。是を以て姓字此女ふ从ふを母ふ因る事よ非ざること明あり第六條よ論ふ諸姓の尽く女よ从ふ字あるを思ひ合せけて上カミり云はき字後オクれと也。孝經援神契。まと玉海ふとよ。伏羲の樂を扶桑とも。扶來也。立基とも云ひ。神農の樂を扶犁と云ひ。黃帝此樂を咸

池と云ふも、孫穀が古微書に、按扶桑歌、即神農之扶犁也。來
 犁音相同稱。是知神農因太皞之樂也。云云。然言ふて、
 咸池も大扶桑圀考に云ふ如く、扶桑の域内、陽谷此一名也。
 此三氏共小扶桑より出し故に、其樂字を名けし也。此
 字も思ひ合ふべき也。此樂ども、事あらず、赤縣度制考も、記せる説等あり、合せ考ふべし。
 斯て少典氏を彼圀より渡らば、其二子此中、神農を前より渡
 せり。火徳を以て、伏羲氏の木徳を承け、黃帝はその後より渡
 りて、土徳を以て、神農氏を火徳を承とせしと聞えし也。少典氏の
彼、圀より渡らざる事、正き證あり、次條、嬴姓の所を見て、思ひ合はるべし。然らば少典、黃帝、炎帝を、
 神典に誰神とちよ當ると謂ふよ。少典を疑ふ、味鉏高彦

根神。亦名を言代、主神と白く。炎帝黃帝は、其子多伎都比古命、鹽冶毘古
 命、此らむを思ふ由あり。其本編の炎帝紀、黃帝紀に謂ふ
 を見るべし。○上件第二條より出せし、太皞氏及び東華小童
 君、此考説はも、往年加此大扶桑圀考に、初稿を著述せし時
 小、其中小込て論牙は一節あるを、今度彼より取出て、因
 を以て、此編より收とる小就て、はと因よ此所より附録せしき
 事あり。其は彼草稿を、始免て門人等より示せし、依時、川崎
 重恭頓よ言はる、先師此見せ給へる。黃帝本行記に、
 扁鵲定脈經、療万姓所疾、帝與扁鵲論脈法、撰素書上下經、と
 云ふ事あり。史記正義、黃帝八十一難、序曰、秦越人与軒轅
 時、扁鵲相類、仍号之、為扁鵲、と云ふ、此記に依

物^れる。ま^と近く平安^に。滕^惟寅^と云^し人^に著^せは^ゆ。史記^{扁鵲}
傳^割解^と云^物を見^侍る^よ。其^總論^よ。按^{扁鵲}。上^古神醫^也。周
秦^間。凡^稱良醫^皆謂^之扁鵲^其人^非一^人也。司馬遷^汎采^摭古
書^稱扁鵲^者集^立之^傳耳。其^傳中^載醫^驗三^條。文^體各^異。可^以
證^焉。蓋^雖司馬遷^而不^知扁鵲^非一^人也。但^受術^于長桑君^治
虢^{太子}病^及著^難經^者。是^即秦越人^之扁鵲^也。其^診趙簡子^者。
見^齊桓侯^者。因^策所謂^罵秦武王^者。鵠冠子^{所謂}對^魏文侯^者。
又^爲李醯^所殺^者。皆^是一^種之^{扁鵲}也。注^者不^知而^反疑^年代[。]
齟齬^枉爲^之說^可謂^謬矣^と言^へ。此^まと其^男正路^と云^ふ人[。]
代^醉曰^古善^医者^名扁鵲^秦越人^因名^爲扁鵲^雖既^有此^說未^論史記^傳扁鵲^非一^人也^今家君^始唱^之案^看破^千古^斯傳^第

一^關當^與識^者
言^耳と^も云^ゆ。其^全編^を視^るふ。此^人右^の黃帝^記に^傳え^得
知^らぬ^趣あ^まぞ。周^秦の^世に^{扁鵲}を^數人^と見^とる^說は^案
ふ^卓見^れぬ^と所^思え^ば。其^を扁鵲^傳を^披きて^秦越人^を
扁鵲^を稱^せる^趣を^思ふ。彼^黃帝^の時^に扁鵲^及び^周秦^に
世^に數^人の^{扁鵲}共^に實^れ姓^名を^別よ^有て^實ふ^も扁鵲^を
謂^ふ。良醫^に通^稱と^聞え^と。然^れに^黃帝^以前^に。早^く
扁鵲^と稱^すは^神醫^{あり}し^故に。其^名を^襲ひ^來たり^や有^ら
む。此^を秦越人^を扁鵲^と稱^せる^一事^を證^として^餘の^は
數^人を^准ず^云む^子細^あき^事あ^まむ^謂ふ^{あり}。ち
て^其眞^の扁鵲^と云^ひし^上に^師說^よ據^て按^ずば^即ち
少^彦名^神漢^名東華小童^君の^異稱^は侍^らじ^や。言^出

ぬゆよ。信然事と思ふ時しも。京ある松浦道輔の許よ。何くまを言遣せしゆ中。神典了。大國主神平國の時。少彦名神波穗よ。天之蘿摩此船よ乘。佐々伎此羽を衣服。ふして海水此隨ふ浮び來給ひし故を以て。扁鵲と稱せ。史記注。黃帝時有盧鑿扁鵲と云。是れ也。越人をも扁鵲と云ひし。其医術の妙を贊めて。是を黃帝此時の扁鵲よ比。牙し。あ。と。丹波雅忠。日本扁鵲と云ひし類あり。扁は通雅。唐劉崇龜傳。乘扁艇。去。此即今之淺船也。形扁。故呼爲扁子。と。の。正。蘿摩此殼を割て作れる。最小。丸船ある。故。扁を言ふれり。鵲を韓語。加佐。伎と云ふ。黃帝蝦蟇經。了。鵲。鵲とも作。と。と。言。れ。ど。今。の。要。よ。非。ざ。る。事。也。

皆漏し。篤胤いは。此二人の説を合せて。尚考ふる。扁鵲といふ稱。實も少彦名神。此御事よりぞ出む。其は彼。扁鵲傳。扁鵲者。勃海郡人也。姓秦氏。名越人。少時爲人舍長。割解云。劉氏云。守客節。之師。故名云。舍長也。舍客長桑君。過扁鵲。獨奇之。常謹遇之。長桑君亦知扁鵲。非常人。出入十餘年。乃呼扁鵲。私坐間。與語曰。我有禁方。年老欲傳。與公公母泄。可矣。傳者謂之。禁方。素問曰。得其人不教。是謂失道。傳非其人。慢泄。天寶言。桑君老。今幸得越人。欲傳禁方。又恐其妄漏泄。天寶故曰。母泄。扁鵲曰。敬諾。乃出其懷中藥。予扁鵲飲。是以上池之水。三十日。當知物矣。當知物。猶言。當知。驗也。於物見其驗也。言汝飲此。蒸水。未到地。蓋受取。露及竹。乃悉取其禁方。書盡。與扁鵲。忽然不。木上。水取之。以和藥服之。

見殆非人也。王維楨曰殆非人言乃扁鵲以其言飲藥二十日。
視見垣一方人。言能隔牆見彼邊之人則通神也以此視病盡
見五藏癥結。明眼如此以診病者藏府洞然上所謂特以診脈
爲名耳と有るを按ふ。此長桑君やぐて眞の扁鵲ふて乃
東華小童君ふぞ有るむ。其は長桑君と稱ひしは當時に寓
名とは聞ゆれども小童君の本因に扶桑あゆふ符合せる
名あまむ邪也。然るを割解ふ姓長名桑君也と云る中
決めてサウふ。但し此字小童君と爲ては常は老翁と聞ゆ
ゆ。疑ひ有るれど此を越人ふ其禁方を授るむ爲る現
形せしうば態と然る老翁を成てぞ出とめむ。然れど斯

此如事とし神眞れ變化妙用を知ざらむ人ふて速きは
得信まじ死事よこそ。其我が神典よ見え給る所を
掌中よも乗り給ひまよ粟莖ふ彈りきて常世因よ渡り給
ひしと見え赤縣籍よ形如嬰孩と見え小子とも小童君
とも申せるをまよ魏華存が許子來て道を傳り給ひし
時を二十ばりの美少年ありしと有るをも思ひ合まべし
是よて遙後あつら彼葛仙翁よ書を贈りて於仙翁れ傷寒
雜病論を著せる事をも密に想ひ合まよ。長桑君の眞扁
鵲小童君とあまよ疑ふ所思れど越人れ扁鵲と稱せし
は此神眞の賜牙依稱り。自稱あるり。或は他よて其驗を見
て字せり詳あらば。此を後生あ不能く考へて定むべし
どを既し医宗仲景考ふ載せりき。はて道輔が説ふ扁字を釋とあま然る事

ねまむ。鵲の韓語加佐、伎亦倭と佐、伎此皮を衣服と爲
 給へ。と有倭よ思ひ寄るを。相似する語あるら違ふ。其
 其皇因此佐、伎といふ言は。古く雀をも鷦鷯をも言ひ
 し語ある故。皇典。仁徳天皇此御名。大雀命とも。大鷦
 鷯尊とも書れ。韓語。鵲をかし。蛇を謂ふとは。固より別
 ふ。鵲をもと皇因無。鳥あり。其を推古天皇紀。六年
 夏四月。難波。吉士磐金。至自新羅而獻鵲二隻。乃俾養於難波。
 杜因以巢枝而産之。ま。天武天皇紀。十四年五月。此下。新
 羅王獻鷦鷯二隻。鵲二隻。と有。ふて知。朝鮮の訓蒙字會
 といふ書。此鳥部の
 鵲。下。下。とあり。然れ。其名。乃。韓語。あり。古歌。鵲
 の渡せる橋の云。あぞ詠めるは。淮南子。鳥鵲填河成橋。

渡織女。あど云。類の故事。依れるあること。先輩此既。云
 へ。如く。元より皇因の事。非。筑前の貝原氏。大和
 本。草。鵲。織。内。東。北。州。小。筑。紫。多。し。朝。鮮。よ。り
 來。り。し。よ。高。麗。鳥。と。云。ふ。鳩。より。小。鷦。鷯。よ。り。大。あ。り。羽。よ
 黒。白。あ。り。て。尾。長。し。本。草。よ。り。載。る。鵲。よ。り。合。て。云。り。筑
 紫。を。朝。鮮。の。間。近。り。れ。後。渡。り。來。し。物。あ。り。こ。を。著。し。若
 古。く。も。筑。紫。よ。り。在。り。し。鳥。あ。ら。ば。新。羅。王。が。鷦。鷯。と。共。に。珍。鳥
 と。し。て。献。る。べ。く。も。非。絲。ば。れ。也。○。後。よ。按。考。る。ふ。埃。囊。抄。小
 播。磨。風。土。記。よ。り。佐。用。郡。船。引。山。の。事。を。云。ひ。て。此。山。有。鷦。鷯。世
 俗。云。韓。因。鳥。栖。枯。木。穴。春。見。之。夏。不。見。と。云。る。説。あり。當。時。こ
 の。因。辺。ま。で。來。り。栖。と。り。と。聞。え。と。然。ら。ば。扁。鵲。此。字。を。用
 也。韓。因。鳥。と。謂。へ。る。を。思。ふ。也。ひ。し。は。何。由。あ。り。を。謂。ふ。此。は。神。典。よ。り。佐。伎。之。皮。と。有。倭
 を。思。ふ。了。爵。り。或。は。雀。を。書。ぶ。き。を。同。音。の。故。を。以。て。鵲。字。を
 假。用。せ。る。あ。り。然。れ。ど。此。を。古。字。と。非。也。其。を。説。文。鳥。部。よ。り。鷦
 鷯。也。段。注。謂。鷦。鷯。即。鷦。字。此。以。今。字。叙。古。字。之。例。古。文。作。鷦。小。篆
 作。鷦。鳥。部。曰。鷦。鷯。鷦。也。言。其。物。此。云。鷦。鷯。也。言。其。鷦。本。鷦。

処の人みれ短人ミヤコトかりと云りは非ぞ稀小き依者の有しか
 るミヤコト予も既ミヤコト三四尺ミヤコトむミヤコト人のミヤコト二三ミヤコト人ハ見とる事
 有ミヤコトりされどそは大抵病ミヤコトおど小羅ミヤコトとミヤコトるかまミヤコトど其身体ミヤコト恰
 好相ミヤコト應せミヤコトどいと醜ミヤコトき者ミヤコトかりき又今昔物語ミヤコトふいと小人の
 形ミヤコト志とる物の出とる事ミヤコト何ミヤコト又さ依物ミヤコトおど此乘ミヤコトもミヤコトたミヤコトき
 いや小ミヤコトき舟ミヤコト此有ミヤコトふ依ミヤコトことミヤコトも見えミヤコトとり又漢籍ミヤコトふミヤコトめミヤコトさ依類
 の物ミヤコト此出とる事を記ミヤコトせるミヤコトめミヤコトまミヤコトく有ミヤコト正ミヤコト是ミヤコトらミヤコト人の形ミヤコトちミヤコト法
 てミヤコトこそ有ミヤコトれいと小ミヤコトく真ミヤコトの人ミヤコトふミヤコトた非ミヤコト父ミヤコト皆ミヤコト一ミヤコト種ミヤコトの靈鬼ミヤコト此現
 えれと依物ミヤコトあるミヤコトきミヤコトし



